

学生が意欲的に取り組める図画工作授業の工夫について ~ 苦手意識を克服する視点 ~

著者	泰田 久史
雑誌名	宮崎学園短期大学紀要
号	10
ページ	201-212
発行年	2018
URL	http://id.nii.ac.jp/1106/00000687/

学生が意欲的に取り組める図画工作授業の工夫について ～苦手意識を克服する視点～

泰田 久史

A Ingenuity Practice of Drawing and Manual Art

Hisashi YASUDA

要旨

中央教育審議会答申によるアクティブ・ラーニングの導入等、学生が授業に意欲的に取り組むための工夫には大きな関心が集まっている。図画工作は能動的学修の要素が多く含まれ、学生自身が主体的に取り組みやすい教科であるが、高校までの図画工作や美術の授業の中で苦手意識を持っている学生も多く見られ、本学での授業の取り組みにも影響を与えている。

本研究では、普段の授業の中に学生の苦手意識を緩和するいくつかの具体的な取り組みの例を提示し、学生の苦手意識を軽減することが、より意欲的な取り組みに繋がるとともに、作品の内容の充実と、幼児教育の指導者としての基礎力向上にも繋がるのではないかとすることを考察している。

1. はじめに

本学保育科は地元志向の学生が多く、卒業後の進路は大半が宮崎県内の保育園や幼稚園などである。当然、造形教育の分野でも指導者の立場になるのであるが、そんな中で子どもたちの「美術離れ」が進んでいるという気になる現実が指摘されている。

地元の宮崎日日新聞に掲載されたジャーナリストの古垣隆雄氏の美術時評での内容が興味深い。氏によれば美術離れが進んだ原因として — 制度的に専門教員の養成が後退したこと、芸術科目の授業時間が減ったことが挙げられる。その結果、制作意欲を持っていても短い時間に仕上げられないと「下手」と見られてしまう例もある。また、全国調査によると「図画工作の授業は好き」と答えた小中学生が80%を越えるのに「図画工作を生かした仕事をしたい」は32%。将来の選択肢が少ないことに対する親の不安をそっくり引き継いでいる数字だ。— 中略 — また造形・美術指導者の長い指導者の言葉として「問題は、自分は絵が下手だという思い込みが親から子へ、子から孫へと伝播していくこと。誰から絵が下手と言われたか親に聞くと『学校の先生』と多くが答える。しかし、誰もが自己表現の欲求を持っていて、子どもたちは造形・美術が好きなのだからその芽を潰してはいけない」と考える。— (2015 宮崎日日新聞—美を歩く—)

私自身が、小学校教諭、中学校、及び高校の美術教諭をしてきたので記事の内容と氏の主張は腑に落ちるものであった。実際に小学校低学年ではいきいきと図画工作に取り組んでいた子どもが徐々に自分の作品に自信をなくし、周りの目を気にしながら製作する姿を見てきた。どうすればその子なりの自己表現を意欲的にずっと取り組んでくれるのかは指導する私にとっても大きな問題であり続けた。

当たり前のことであるが、将来小さな子ども達に造形活動の指導をする学生自らが、まず意欲

を持つことはたいへん重要である。

苦手意識を持っている学生は「自分の作品に自信がなく、上手くできない」と考えている傾向が多いように感じていた。また、学生のみならず、実際に保育現場で働く保育士や幼稚園教諭にも苦手意識を持っている人が少なからずいることはこれまでの造形指導者研修会や幼稚園教員免許更新講習等で感じていたことであった。

どうすれば、苦手意識を緩和・軽減できるのか。まずこれまでのアンケートから実態を見てみたいと思う。

2. 昨年までのアンケートから

本学に来て3年目であるが、授業の最初の時間に学生に高校までの図画工作や美術の印象や苦手意識を自由に記載してもらったアンケートを実施してきた。自由記載のため、「アニメが好きでよく描いている」とか「小学校でやった版画が難しかった」など個人的な体験談が多かった。記載された内容は主に個別指導に生かすためのもので、詳細に分析したものではなかったが大まかな傾向は把握できていた。アンケートでは、図画工作や美術が好きな学生も勿論いるが、全体の半数以上は何らかの苦手意識を持っている様であった。昨年のあるクラスのアンケートから、代表的なコメントを取り上げてみる。

授業1コマ目のアンケート（これまでの図工や美術についての感想から）

<苦手意識を持っている学生のコメント例>

- ・ものづくりは好きですが、絵を描くことは苦手であり好きではありません。
- ・絵を描くことが苦手で、工作も一つひとつ時間がかかります。
- ・絵を描くのが苦手で、はさみで切るのも好きではありません。
- ・絵を描くのは苦手ですが、色をぬるのは好きです。
- ・ほんとに絵を描くのが苦手で。

<図画工作や美術が好きだと答えた学生のコメント例>

- ・絵を描くのが大好きで、小さい頃からたくさん絵を描いてきました。
- ・中・高は美術部でした。着色を褒められたことがあります。
- ・幼稚園、小学校の頃に絵でよく入選していました。図形等は苦手です。
- ・電動のこぎりで一回褒められたことがあります。風景画が好きです。
- ・小学校のときに版画で入賞しました。今はパソコンで描いています。

アンケートから見えてきたのは次のようなことである。

- 苦手意識を持っている学生のほとんどは絵を描くことがネックになっている。
- 工作に苦手意識を持っている学生はわりと少ない。
- 図工や美術が好きだと答えた学生の多くは絵を描くことが得意である。
- 図工や美術が好きだと答えた学生の多くはこれまでに入選して表彰を受けたり、先生や友人から褒められたりした経験がある。

これらの結果から、やはり絵に対する苦手意識を取り除くことから始める必要があると考えた。また、学生自身が作品の出来のみにこだわることがないように、作品の良し悪しと保育者としての指導力と関係がないことも示す必要があると考えた。

3. 今年度の取り組み

今年度はこれまでの取り組みを生かし、苦手意識と意欲について目に見える形でアンケートを取る事にした。以下のようなアンケート（表 1）を用意し、おなじ内容を授業の最初（1回目）と後半（11回目）に取ってみることにした。

実施したのは本学保育科 1 年生の 2 クラス 69 名である。

表 1 図画工作の授業についての意識調査

図画工作の授業について（アンケート）	
・ 苦手意識	
1 全くない	
2 あまりない	
1、2と答えた理由（	）
3 ふつう	
4 少しある	
5 かなりある	
4、5と答えた理由（	）
特に何が苦手ですか（	）
・ 意欲	
1 かなり意欲的	
2 少し意欲的	
1、2と答えた理由（	）
3 ふつう	
4 あまり意欲がない	
5 かなり意欲がない	
4、5と答えた理由（	）

授業 1 コマ目のアンケート結果は次のようなものであった。

まず、苦手意識については下記のようなものであった。（表 2）

表 2 意識調査結果（苦手意識）

1 回目の授業で行った苦手意識(69 名)	
全くない	11 名
あまりない	11 名
ふつう	24 名
少しある	15 名
かなりある	7 名

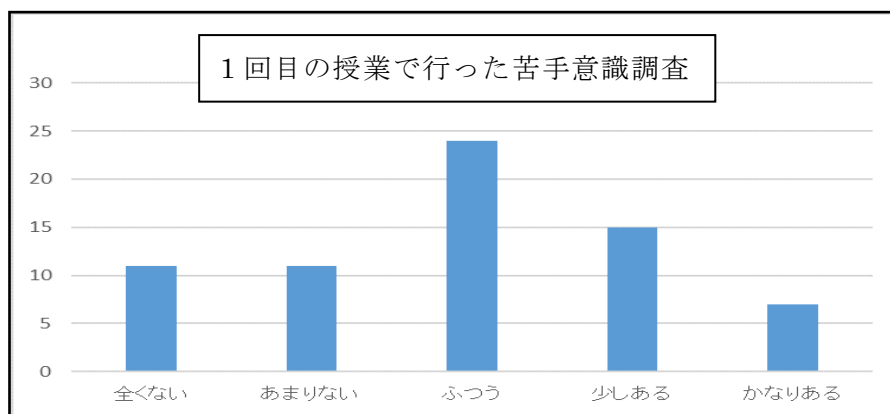


図 1

苦手意識調査の結果を図 1 に示してみた。普通が最も多く、苦手意識がある学生とない学生が同じようになっていることが分かった。苦手意識がある理由としてはやはり「絵が不得意である」というものが大半であり、その他には「不器用だから」とか「発想が湧かない」というものがあった。気になったコメントとして「苦手なのに作品を貼られて恥ずかしかった」というものがあった。

次に意欲についての調査の結果を表 3 にまとめた。

表 3 意識調査結果 (意欲)

かなり意欲的	21
少し意欲的	14
ふつう	30
あまりが意欲ない	3
かなり意欲がない	1

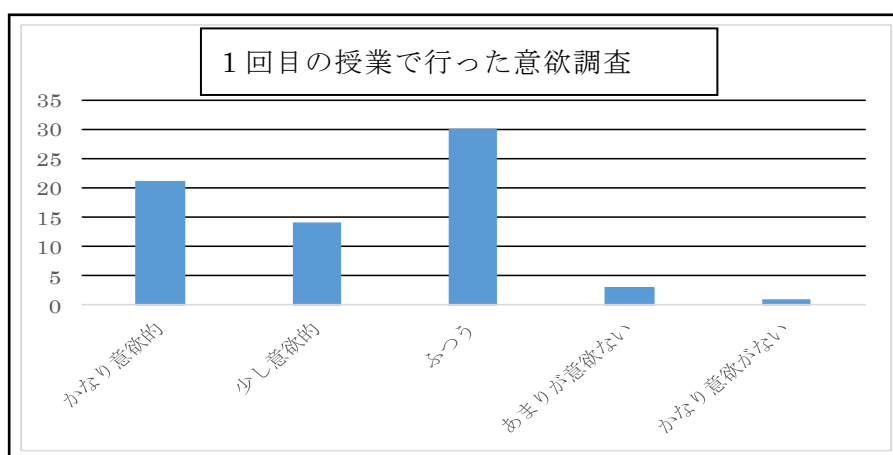


図 2

意欲調査 (図 2) では意欲的と答えた学生の答えとして「絵が好きだから」とか「作ることが好きだから」等が多かったが、「将来役に立つから」と言う答えが複数みられた。苦手意識と意欲がきれいな比例関係として出なかったことの原因のひとつとして、学生が保育士などの職業を意識していたことが考えられる。また、苦手意識はあっても前向きに取り組んでいる学生も多くい

ることはうれしいことであった。製作活動など体を使う授業を保育科の学生は好む傾向があるように思う。

4. 今年度の授業の実践

これまでの実践と今回のアンケートを参考に今年度は次のような目標や留意点を考えてみた。

- ・前半に絵の苦手意識を緩和する授業を丁寧に取り入れること。
 - ・学生が自然にハサミやのり等の道具を使えるように教材を工夫すること。
 - ・苦手意識の少ない工作では、学生がまだやったことのない教材を取り入れること。
 - ・保育現場で実際に使えるものをなるべく多く取り入れること。
 - ・幼児画の発達の仕方など「保育者」として必要な知識を身につけること。
 - ・なによりも、作品の出来で判断せず、それぞれの頑張りや工夫を認め、励ますこと。
- 等である。

以下に、今年度後期の学生作品の例を示しながら実際の活動についてまとめてみる。

5. 絵に対する苦手意識を緩和する取り組み

アンケートから見えてきたものを参考にして、シラバスでは、絵に対する苦手意識を緩和しやすいように描き方の指導を最初に持ってくるようにした。

「人物」「動物」「花・果物」の描き方をゆっくりと進めた。最初は赤ちゃんの顔や動物の顔など部分的に始めるとともに、描きやすい簡単なイラスト調のものから始めた。慣れてきたら少し角度を変えたり、名前をつけるなど絵に親しみが湧くようにした。

描いた作品は一人ずつ持ってきてもらい、作品に赤で丸をつけたり、学生の親しみやすい一言コメントがついているスタンプ等を押して安心感を持たせるように工夫する等の展開をした。(写真①)

最初は自信がなさそうに作品を見せに来ていた学生が、描くたびに褒められたり、丸をもらったりしてうちに恥ずかしがらずに提出に来るようになったように感じた。



写真①

前半の5回目が終わった段階で感想を書いてもらった。コメントには次のようなものがあった。

- ・絵を描くのが苦手だったけど、丸や円だけで動物や人を描いて楽しくて少し克服できました。
- ・これまでに習った子どもの顔や動物、花などの描き方が生かされて日常でも描いています。
- ・はじめはすごく絵を描くのが嫌いでいやだと思っていたのですが、簡単な描き方を教えてもらって、少しは上手く描けるようになり、楽しくなってきました。
- ・下手でも良いと先生が言ってくれたので、少し自信を持つことが出来た。
- ・絵が苦手だったのに、ポイントを掴めば動物や人の絵が描けるようになり本当に嬉しいです。

- ・子どもも絵が好きな子、苦手な子がいると思います。その時は簡単に書ける方法を教えてあげたいです。
- ・保育士になって絵を描いてとせがまれることがあるかもしれないので、授業の中で描いた方法で描けるようになりたいと思いました。苦手と思わず、積極的に取り組んでいきたいです。
- ・私は小学校のときには図工という授業がとても苦手でした。でも、子どもの目線になって自分なりに教えられるレベルなら自分にも出来ると思えるようになりました。

以上のような感想を多くの学生のアンケート調査から見る事ができ、やりがいと喜びを感じることが出来た。作品の内容も充実してきたように見え、6回目以降の絵以外の授業でも折り紙などの比較的學生が意欲を持って取り組みやすいものからはじめながら、極力良い点のみに目を向け、評価・助言を行うように心がけた。

6. 絵以外の製作

<折り紙>

折り紙は學生にとってなじみもあり、取り組みやすく保育現場でもよく取り入れられる教材である。基本的な折り方を全体指導し、苦手な學生は周りの學生がフォローする形で作品を作っていた。各自が自分のレベルに合わせて製作物を選ぶようにプリントをたくさん準備し、自由に取れるようにした。また、得意な學生が飽きないように、資料などを自分たちで探し、作ってもよい事にした。

保育現場での指導については、子どもの年齢を考え、たとえば「三角に折る」と言うのか「お山に折る」と言うのか、「角を合わせる」と言うのか等指導方法について考える場面を作った。作品は後で見直すことができるように、スケッチブックに貼っていき、作品に合わせた背景を描くように指導した。(写真②)



(写真②)

<切り絵>

切り絵ははさみの使い方やのりの使い方を身に付けるのに適した教材である。

はさみの指導は次のような順番で指導する。

- ①まず紙テープなど幅のせまいものを抵抗なく切っていく
- ②直線になるべく長く切っていく
- ③ちょうどよい所ではさみが止められるような止め切りが出来るようになる
- ④一枚の紙から円が切り取れるようになる



(写真③)

授業では、技術を教え込んだり、練習を重ねて身に付けるのではなく、いつの間にか活動を通して習得ができるように配慮した。基本的な切り絵を全体指導し、たくさんのお見本を示しながら、学生の創意工夫が作品に反映されるように工夫した。

切り絵は切り取った残りも作品に使い、配色を工夫すると思いがけない効果が出ることもある。一人で集中的に作業する時間の中にグループでアイデアを出し合う場面を作り、楽しく製作できるように配慮した。(写真③、④)



(写真④)

<ミニ製作>

切り絵の活動には今回4コマ分の時間を使った。四つ切りの色画用紙にテーマを各自で考え、それにあった内容の切り絵を製作した。時間が長すぎて進度に差が生じたり、中だるみを避けるために適宜、折り紙を利用して短時間でできる子どものおもちゃを紹介するなど工夫した。(写真⑤)



(写真⑤)

出来上がった作品はたいへん個性的なものであった。作品に氏名と一言コメントを書き入れた。季節にあった作品やテーマにあった作品は地域貢献のイベント(保育フェスティバル)等に掲示した。

(写真⑥)



(写真⑥)

<身近な素材を利用した作品作り>

右の作品は紙コップを使ったパクパク人形である。アイデアスケッチの段階ではアニメやマンガのキャラクターを模したものが多かったが、見本作品に多く触れることにより、それぞれ工夫の見られる作品が増えてきた。(写真⑦)



(写真⑦)



(写真⑧)

左の作品は、同じく身近な素材を使った作品である。ストローや新聞、牛乳パック等を使い、竹とんぼ等子どものおもちゃを作った。(写真⑧)

<粘土造形>

前期の授業では土の粘土を使っての陶器作りを授業の中で取り入れた。ぐい呑み程度の大きさであったが、学生はたいへん興味を持って取り組んでいた。

全ての陶芸の工程を行うには時間が不足したため、釉薬付けや焼成などは教師が行った。夏休み明けに作品を返却したが、やわらかかった土が固く焼きしまり使える陶器になった喜びを感じてくれたようであった。(写真⑨)



(写真⑨)

後期の授業では、焼成する時間が取れないため消しゴム作りを取り入れた。市販されている5色の粘土を使い、思い思いの形を作った。使用しやすい形を作る学生がいる一方、使用には関係なく、好きな造形をしている学生も多かった。出来上がった形をお湯で加熱し消しゴムに仕上げた。陶芸とは違った化学変化で作品が使用できるようになることを興味深く感じているようであった。(写真⑩)

陶芸、消しゴム作りはともに学生が高い興味・関心を示してくれた。粘土の持つ可塑性や感触、自由性などが要因であろうか。



(写真⑩)

<絵本作り>

下の作品は、前期の学生が製作した1枚のケント紙から出来ている絵本の作品である。(後期は今後実施予定)表紙と裏表紙を入れて合計8ページ分の内容であらすじを考えた。

伝えたい子どもの年齢等を考慮し、うまく伝わるように考えなければならないので、総合的な力量が必要な教材である。後にも残るものだから成績や評価を気にすることなく、大切な子ども達へ伝えたいことを絵本にするように指導した。また、絵が上手く描けなくても、配色や素材、様々な技法を使うことで十分作品が出来ることが紹介しながら製作した。(写真⑪)



(写真⑪)

7. 取り組みの経過

授業 11 回目に 1 回目のアンケートと同じものを配布し、調査を行った。(表 4)、(図 3) 及び (表 5)、(図 4)

全くない	15 名
あまりない	17 名
ふつう	25 名
少しある	10 名
かなりある	1 名

表 4

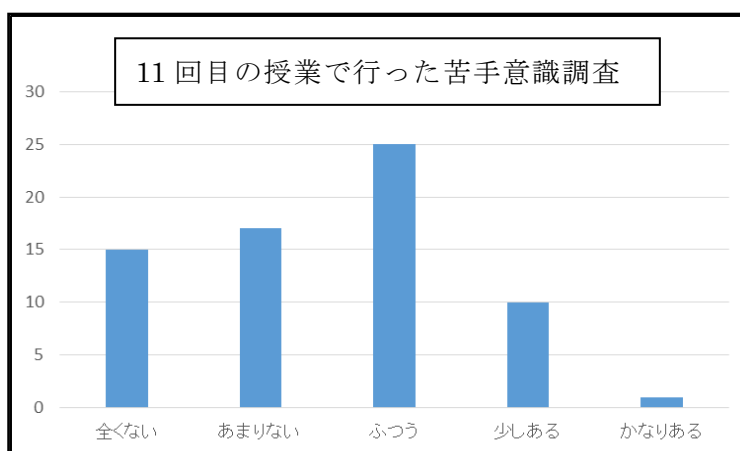


図 3

かなり意欲的	27 名
少し意欲的	17 名
ふつう	23 名
あまりが意欲ない	0 名
かなり意欲がない	0 名

表 5

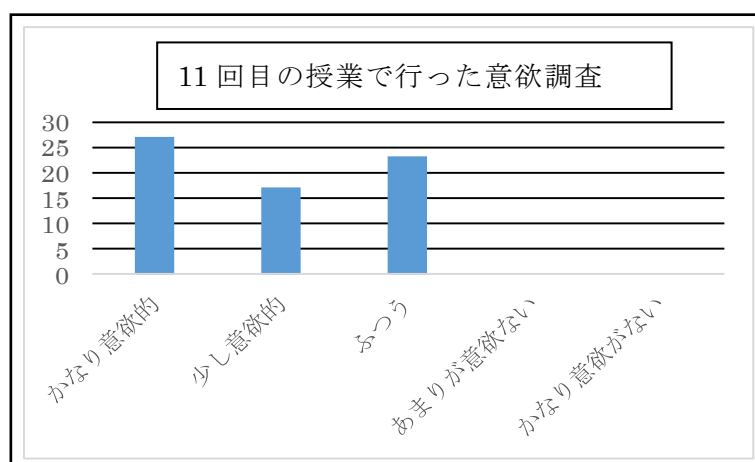


図 4

8. 苦手意識と意欲の変化

授業1回目と11回目で取ったアンケートを比較したものが下のグラフである。

苦手意識の低減と意欲の向上への変化が出ている。特に意欲に関して、あまり意欲がない、意欲がないと答えた学生が1名もいなかったことはとてもうれしいことであった。(図5)、(図6)

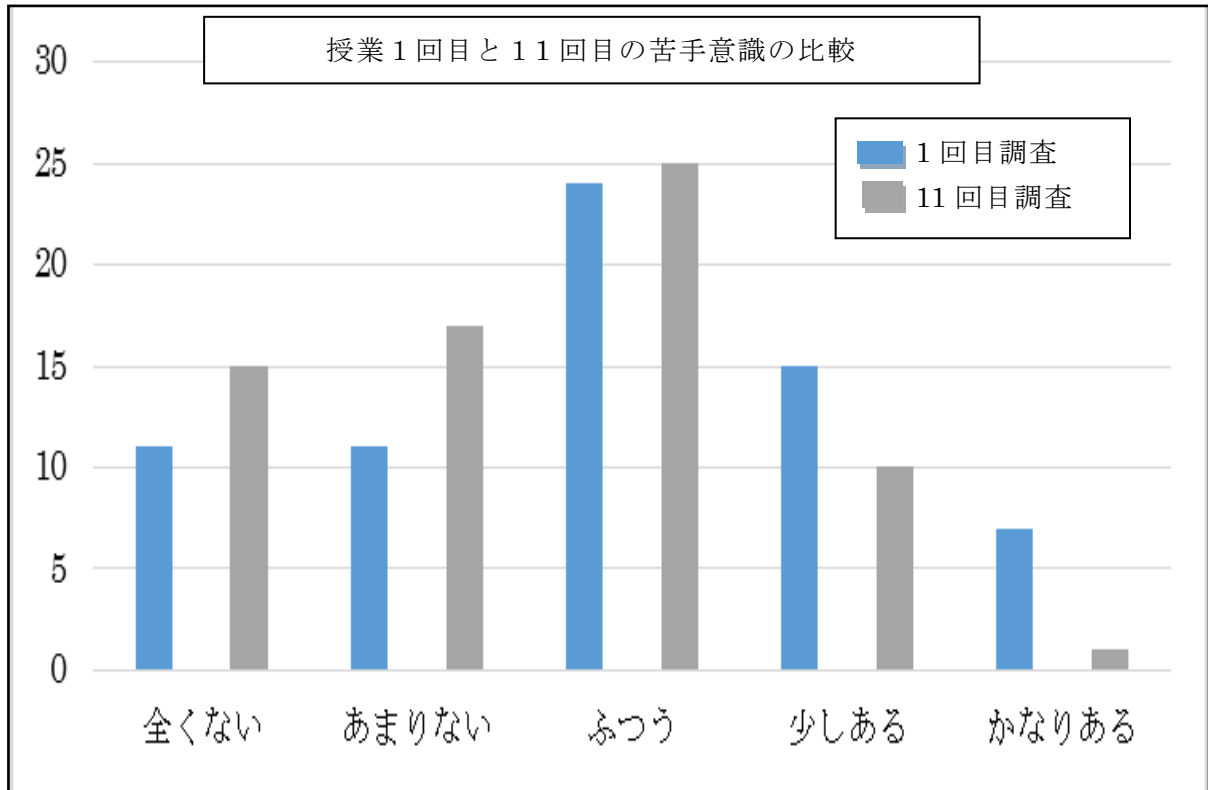


図5

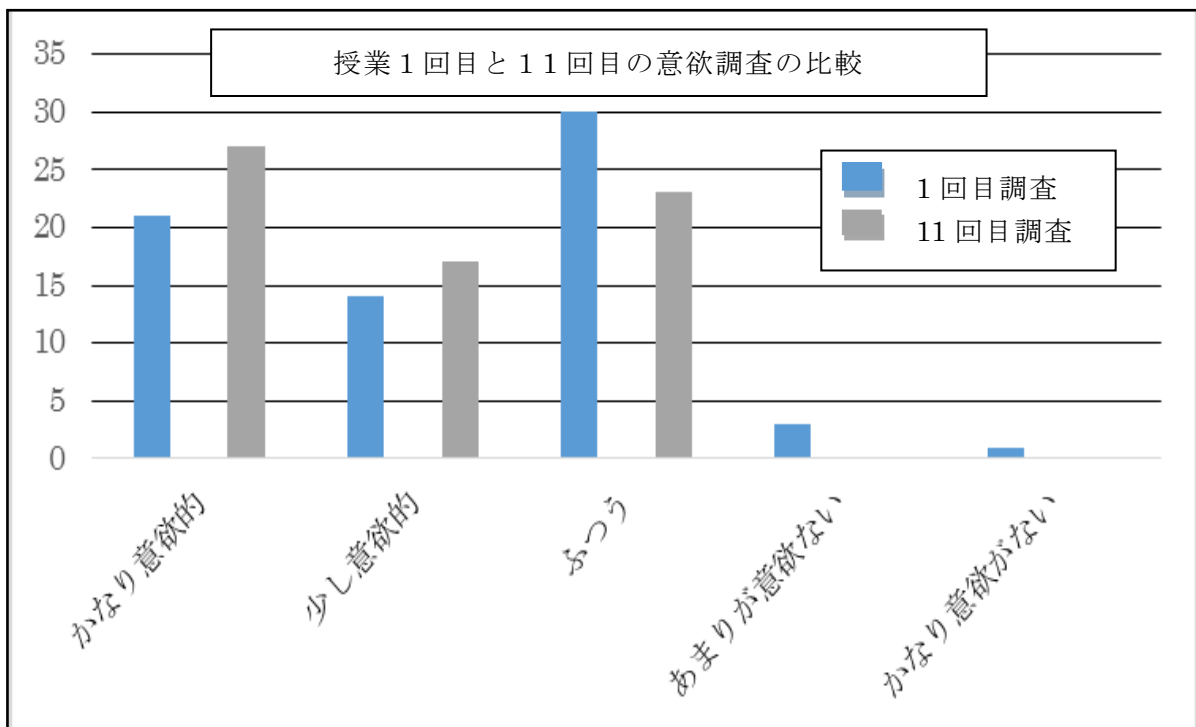


図6

9. 考察と今後の展開

今回取り上げた授業の中身は決して特別なものではなく、他にも同じような取り組みをされている指導者は多くいるはずである。また、取り組んだ内容のどこが結果に繋がったかが直ちにに見えるものでもない。しかし、苦手意識を軽減するための小さな実践の積み重ねがなにより大事だと思う。教材や技法以外で私が常に心がけた事といえば「もっと上手く」とか「もっと正確に早く」などと言わないことであり、小さな子ども達の作品に接するように「それでいいよ」とか「よく考えたね」など学生の作品や発想、意欲を認めるようにしたことである。技術的な指導については基礎・基本になるべく絞り、学生の工夫から発展するようにすると作品の質も向上したようにも思う。

成果が出た背景として、「保育者養成学校の学生たちは苦手意識を軽減しやすい環境にある」ということも挙げられよう。将来指導する子ども達の造形活動には高度な技術が必要なものは多くなく、大事なことは「表現の喜びを共感すること」であったり、「使う道具の選別や管理」であったり、「子どもたちへの言葉かけ」であったりするからである。

図画工作や美術が他の表現活動と大きく違うのは、図画工作や美術への「苦手意識」の多さである。私は小学校、中学校、高校で実際に児童や生徒に向き合って指導してきた経験があるが、その印象では、小学校中学年くらいから徐々に「苦手意識」を持つ児童が出始め、中学校ではさらに増えていき、「苦手意識」が「劣等感」に繋がる場合もあるように感じていた。山形大学紀要にある降旗孝氏の「図画工作・美術への〔意欲〕・〔苦手意識〕の実態と考察」(2015)にもそれを裏付けるデータが示されている。

教師の指導や工夫でその「苦手意識」や「劣等感」は軽減できるし、さらに言えば小学校や中学校や高校で、他の教科等に「劣等感」を抱いていても、図画工作や美術の授業を通して自己肯定感を高めたり、自信をつけていく事例をたくさん見てきた。普段問題を抱える生徒が、作品を褒められ、うれしそうな笑顔になった表情は今でも忘れられないものである。

小学校学習指導要領解説図画工作編でも、中学校学習指導要領解説美術編でも知識や技能とともに、「感性」、「情操」、「心情」、「創意工夫」等が大事にされている。

これまで私は作品至上主義になりがちな現場の雰囲気疑問を感じていた。その原因としては、指導者の思い込みや慣習、コンクールの影響等様々な要因が考えられるが、出来ることから始めるしかない。

近い将来、保育現場に立つ目の前にいる学生たちの苦手意識を少しでも緩和・軽減し、なによりも造形活動を楽しみながら子ども達といきいきと活動くれたらと願う。

今後は地元の素材や伝統工芸を教材に取り入れる等さらに授業を改善・工夫していきたいと思っている。

引用・参考文献

- ・文部科学省（2008）「小学校学習指導要領解説図画工作編」
- ・文部科学省（2017）「中学校学習指導要領解説美術編」
- ・林健造・岡田愨吾（共著）保育の中の造形表現 サクラクレパス出版部
- ・降旗孝（2015）図画工作・美術への〔意欲〕・〔苦手意識〕の実態と考察 一児童・生徒・大学生への実態調査結果から一 山形大学紀要（教育科学）第16巻第2号別印